

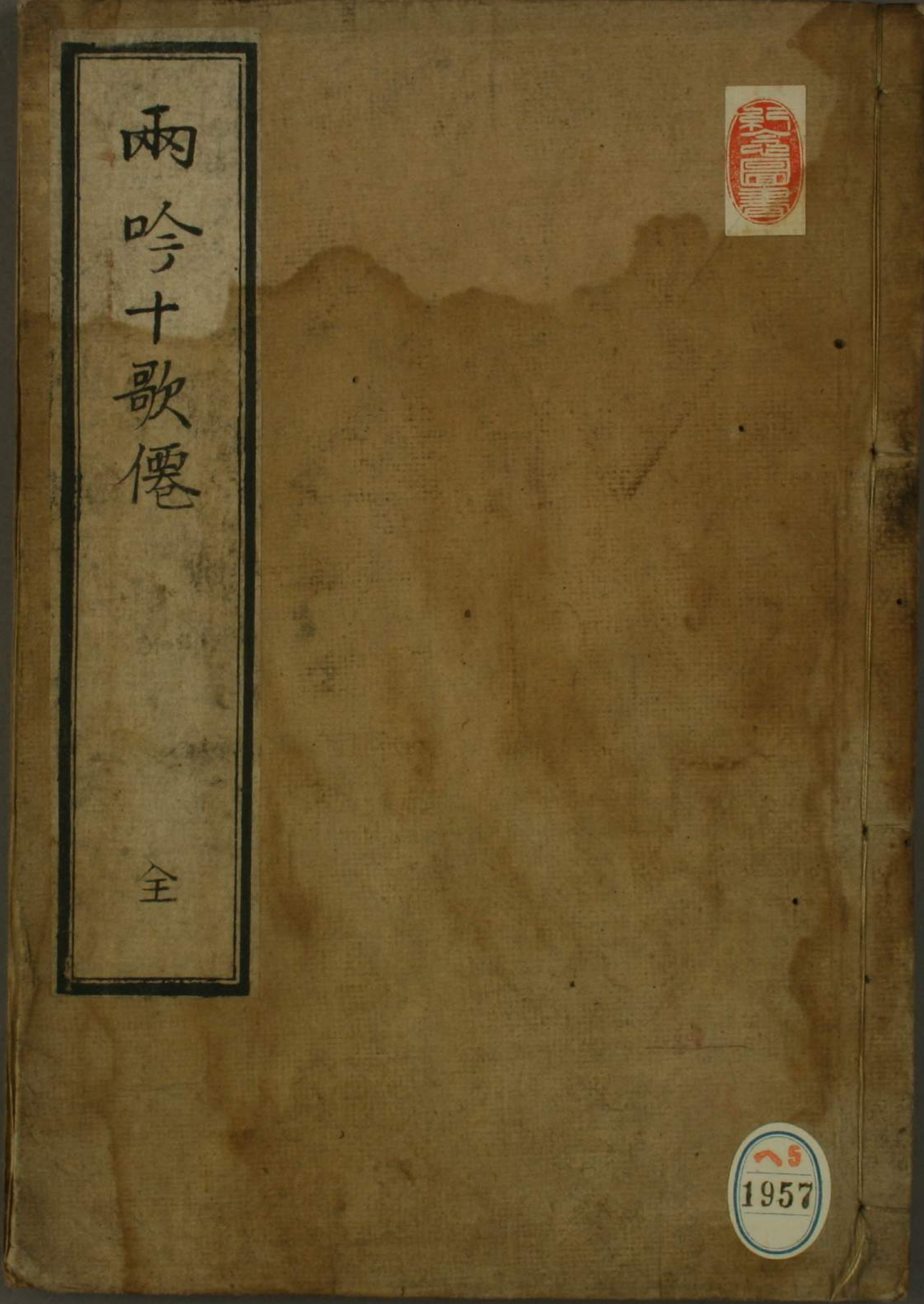
Kodak

LICENSED PRODUCT © The Tiffen Company, 2000

KODAK Color Control Patches

Centimetres

Blue	1	2	3	4	5	6	8	9	10	11	12	13	14	15	17	18	19
Cyan	2	3	4	5	6	7	8	9	10	11	12	13	14	15	16	17	18
Green	3	4	5	6	7	8	9	10	11	12	13	14	15	16	17	18	19
Yellow	4	5	6	7	8	9	10	11	12	13	14	15	16	17	18	19	
Red	5	6	7	8	9	10	11	12	13	14	15	16	17	18	19		
Magenta	6	7	8	9	10	11	12	13	14	15	16	17	18	19			
White	7	8	9	10	11	12	13	14	15	16	17	18	19				
3/Color	8	9	10	11	12	13	14	15	16	17	18	19					
Black	9	10	11	12	13	14	15	16	17	18	19						



兩吟十歌僊

全

1957





5
1957

兩
吟
十
款
記

瀧澤文庫



程急の辨れ六くあるまゝに
 汝こそ十巻はまづ分とはあまじり
 只自己の辨れを字よみか
 世小ぢりそめ人こそ名をゆふも
 亦とあれとむれ一いんも同はれ
 初とるもあま風月名の人
 弟の福中いかにいふまゝの御ふ
 こそ志しむるをいふまゝ子息小
 美年林かこれの暖り一いふまゝ

龍澤文庫



その評やむらじきししれ八重
又作心の自解を改書——
一 小冊子ととりあはせ千服着る
好ふ好むと云ふひとか〜
〜

付こ明成中

まじり日

第一

東園舎

羅文

十は他春二歌の空やぬれ
子星のまをたゆも風死
又まほふし
夕の好い思ふより

英はまえ〜思ふ山を〜
〜
〜
馬琴

あ〜馬と〜
〜
〜
文

花のまゝの部波もたれかゝる
琴

深きく産行橋
文

宰興小原の別荘おろし
琴

銘りト部まきつるあり
琴

人參ふらふ山袖を飛鳥川
文

下の十日を降るふも雨
琴

の如くろく

同麻とく久い末社子割會
文

くまの穴ありや母春る山遊
琴

梅の子れ駈と紺文牛尾尻
文

膏・香す一の屋格の中りあ
琴

判於くも十年の秋る月
文

世ふさひ船り紫衣を換
琴

のまゝのわらわの子と
あつたやれりて秋衣
を場をのめりてん
二のつて
えまゝに

人居ぬ跡に遺るるの音も
文

神と申す所の下の宮
琴

白藤の華咲くよ
文

けり忘れぬ鳥の聲も
文

消遠と自許のうたに
文

お置りよとて
琴

数々の花もあはれ
文

あめつとふは
文

第二

亭下々

馬琴

ふとて
文

屋中
羅文

むら

又幾句 花よりとかな
山寺の音も少く
いふの解といひ
白地の下
解の元
思ひ
是亦未文

脚
四つと物のおり
して一作の夫婦
句
海の下

膳をいさ言を一河ふりまきり
文

いさゆりの歌り墨筆も
琴

檜^サ綿いさ言まきり月のみ
、

流るる水は海のいさ
文

司正系圖自懐もかき
、

下戸より文くまき酒盛
琴

ふの忌片女おきりさかき
文

むくく鳥の啼きかき
琴

ふき小浦の細紀夕々
文

美声しりさの文志四月
琴

殿守りさしららし
文

ふきぬ言志りさ
琴

之をくく 教免の四法と半の 文

十町一の所を山の端の所 琴

駕の着は那 夫を花を夜 文

さる草より下を局中一先 琴

張羅のみ位の高帽をいふ 文

まけの漏のほふは空の 文

右は中よりかへつ縄をえたる 琴

疾よりまぬく一かきとけり 文

の所よりまき後窓四脚の法を 琴

漁箱より加減ゆくりをえ 文

ふくしの強ふあきする下河原 琴

又翁よりる 鷹をみる西つき 文

如き終り夷の玉小み也此くえ 琴

物備家の唱守一曲 文

海の月心のこころ只ちちと 琴

美代のまろ色く思あり 文

剛貴の宿方ぬ終は榮蓮く 文

白花ひりえりかゝる里技指 琴

湖色くくありあ
て奥指を送るに
化すのまは只
ゆき多ゆきと
ふひきさか
い月明あきハ

きくしあい晦日小髪を流ひり

院町のゆきしらゆき市の人市人 文

花をとり晴るおののちとさ

御道のちふゆきとさ 琴

第之

世を馬の尾流に掃きおきて凡 死文

これふ丹の押掛しりたるなり

塚と葬し小右と云しりも 三行

漣下横し下 為き八重七根

夕アうとあく 月の友とら 又

いはは翁者の名字とあしき

あつとあく 小右と云しりも 三行

荒らとく 唐申塚の控とる事

照る日る月小乞食匍匐 又

病と知るを控と寸白と押くや 三行

との山子と揚をいそく 又

一と好とまきとく 小右の控と寸 三行

甲一雙の志と根小墨とる事 又

初命に不老の漸成りて

道草一と意々

母の懐りし守りい

くま中一の秋まき

茶のゆるとい菴のゆ

雪の昔の月早や

瑞々

文字小頭一

うら

信正の心付れ

うら

又志ぬ火の沖子

意のせとま

縁の字を白み

み

む

うら

足

如之流の字分りしと
例の字ありて
その外ありと
明の後悔止され

この巻のいふべき
はつらふ
とたふ
はつらふ

禪解の刀自、會釈のこゝ別々 又

法こゝ

そふ前中先とさわらむまらむ。 又

句端

内陣の終の光りも、歩る松ふ 又

月と夜句の連句一語 又

とらふあま扇も任澄やらむまらむ
相及びの空と産 又

内中ささく深きり秋 又

うらむ

り
老の羽も扇も空座り片尻 又

今も使ふ撰り 松而 又

人のこゝろ

軍中も殊ふ大事は松の雨 又

いふ

空とくちとる乾く 又

花ふびり松ふまらむ。ひのあま 又

まのまらむ。長田ゆる空 又

第四

ふん

鳥城の臺より牛の子を養ふ

表より表へ向ふ新地

ら又

一より一語の咽をきかす

後より後へ荒縄の帯

又

その心腹を月夜に

かろし

冷まのくは響生む

又

東西ふらふら秋葉の篠

ゆらゆら

登山の思の響をたづね

又

けしきをたづねる

又

去塚のくは小軍勢

又

ちんむ川能は赤雲

又

海のくは男と女あり
但し其の相あり
一とくはありあり
その又らんといふ
彼のみをたづねる
けしきをたづねる

里よりくは
その心腹を
月夜に
かろし

るを〜居る下の横川 又

新並子河津堂乃魂より心 又

書堂乃字好を〜たつ枝 又

と〜汲〜を〜銚の口〜と〜
ふら〜 又

先着〜と〜舟音の船風 又

徳政人納目の影を〜
ま〜 又

は方世〜ふ秋乃水殿 又

又〜と〜そ〜江戸の身は〜
あ〜 又

と久〜と〜昔祿恒の宿 又

七癖の〜は〜母の〜
あ〜 又

朔日〜を〜乃〜と〜
あ〜 又

出〜り〜あ〜れ〜ら〜の〜
あ〜 又

水落もあつゝ流石のしりし

第五

雁

大なる小音をそとられ雲の峰

さう苗起る暁のきり水

あつゝ流石の御ふこころもあつゝ

まのへらとあつゝあつゝ

月のあつゝあつゝあつゝ

あつゝあつゝあつゝあつゝ

美流流るゝあつゝあつゝ

あつゝあつゝあつゝあつゝ

人やあつゝあつゝあつゝ

あつゝあつゝあつゝあつゝ

あつゝあつゝあつゝあつゝ

台船の... 又

... 又

又

深鏡... 又

... 又

一家... 又

... 又

... 又

... 又

... 又

... 又

... 又

小一里もあつてもや田舎道

又

と云ふも今や死かんと痛く

又

顔もさすとも苦く折

又

荒浪も別道は晴の風情

又

雲霞もあつても居あつ

又

費之のころの月、暗く

又

まはれりし秋されり客

又

悠々たる岸もさし

又

舟も波もさす大ま

又

昔もんとさの幕半

又

離れ日乃あつ

又

一季者一又凡中の系

物也

都一と家の名のむこ 又

さよふれ梓ふ折く斤一心 又

泉活き命くを長を徳 又

ぬきや曲宴焼くやう 又

累細ゆく月了夕涼 又

少群て若殿原の喜見城 又

免二人をほり碑一は杖 又

枕より夜まの鐘ハ少あふ 又

権志 弟一りり名流並 又

わあねく流之果流のまか 又

山事好く角一と中をふ 又

みのちハ心を思くぬ判者 又

目録~~~~~
目録~~~~~
目録~~~~~

小座敷小塚の園~~~~~
小座敷小塚の園~~~~~
小座敷小塚の園~~~~~

川ぬはあきり~~~~~
川ぬはあきり~~~~~
川ぬはあきり~~~~~

ちる危小亜相の車~~~~~
ちる危小亜相の車~~~~~
ちる危小亜相の車~~~~~

酒の向~~~~~
酒の向~~~~~
酒の向~~~~~

才七

~~~~~  
~~~~~  
~~~~~

羅文

鶏籠~~~~~  
鶏籠~~~~~  
鶏籠~~~~~

人間~~~~~  
人間~~~~~  
人間~~~~~

~~~~~  
~~~~~  
~~~~~

~~~~~  
~~~~~  
~~~~~



是の如く... 版の... 又

嵐の... 蛇... 又

土... 澄... 又

以... 家... 又

上... 落... 又

物... 紅... 又

近き... 如く...

天

日照... 雨... 又

お... る... 又

碑... 又

万... 又

万... 又

男... 又

...

天

将籍よるの小法小居合め  
又

こまいたけふう譜業なる  
又

以地はりふも待屋の極産  
一  
又

瓶小地ヨロナ小使母を相  
又

何物ひ取をハッあらふけとも  
又

物とやうものともとのあこ  
又

こしは縄際程の煮メのび遠ひ  
又

負を伸しも能宜う厄女  
又

渡親にしこの隅ふあわい  
又

義き並なここあ付死のあ  
又

ちりくの尾をく末小月の号  
又  
あ

早はや空あしし丁的の号  
又

秘藏子小玉の筭こころ又

おのの皮切りし又

短夕の煙い又

中玉生烟い又

与由をい祝い又

邪い又

底

4

若原の日吉樂い又

鳥惜子い又

二子い

才八

菊起い又

池水風い又

るい

4

隣りあふ船張るまはるまはる  
又

しらべしるまはるまはるまはる  
又

しらべしるまはるまはるまはる  
又

西をみりあはるまはるまはる  
又

道風ふき南の舟を送る橋船  
又

あふまはるまはるまはるまはる  
又

4

夷曲と酒さるまはるまはる  
又

四十九日つらむ白河つらむ  
又

一勝ふ我門をまはるまはる  
又

はるまはるまはるまはるまはる  
又

月さゆまはるまはるまはる  
又

浪波の境編も流るまはる  
又

山

山



うく小遣<sup>シヤム</sup>羅の赤服を透す  
友いさひの洞年一書  
いふは書く双鏡子月の三階  
二竿一水れいなる飛行  
鶯<sup>ウ</sup>鶯乃書久く立  
戸あゝ友人のくも家

備金う淵あねくし胸の浪  
入のくもく甲をあはしり  
知もちの半舟よはるる  
何玉をくくくく  
く



さしくと懐の裡とくちあはれ  
又  
蝙蝠もまじりたる月の太刀  
又  
と尻のしれと合志の法かき  
又  
おるるといざんは痛くさる  
又  
神瓦の曇りふ雷乃一鏡し  
又  
擔桶並く並脊戸の若き  
又

ナ  
逃くまきく對の雛の流伝居  
又  
軍のりまきくも見おのゆるいみの知  
又  
あむくふけりる留る流伝神  
又  
集くくえりるハロメの流  
又  
その中と像ゆきく小感り  
又  
傍草達と母らもあつる  
又



行地ふ計しむまき音のふれ文と 又

のまことまき音の空と入際 あら 又

解きうちの紫自燈とよまき 又

ゆ女小砂をく温泉場のつあ 又

月の糸子五人のはまきと 又

つとまの啼けハ甲かき鶴 又

<sup>ラ</sup>稲きぬ島ふも秋のまきと 又

まの之神の影を控ぬと 又

老僧の紅衣をくは出音の音 又

棟之ケ明る乾坪一の櫃 路 又

曆ふもくくくくくくく 路 又

ふ知ふのくくくくく 路 又

第十

馬琴

角の棟子此より霜は

山唐糖控しわらこらのよ

羅文

そ逢のちよけ二つ控向

とやうきさきしよん

と

若月の粉ナ控ふる句の音

同心所の振色の音の又

美り

新装之の霜鞠後の音

女子日照る山の音

又

従らし妙分の音

又

系の音

又

じく起ふ影しらすを田植時 又

あかしの影しらすを田植時 又

空をまわす影しらすを田植時 又、

投壺の影しらすを田植時 又

同書しらすを田植時の影しらす 又

月と影しらすの影しらすを田植時 又

志す魚の影しらすを田植時 又

いゝ影しらすを田植時の影しらす 又

まけの影しらすを田植時の影しらす 又

連なる影しらすを田植時の影しらす 又、

いゝ影しらすを田植時の影しらす 又

澄の影しらすを田植時の影しらす 又

酒のまろ吸あまのまろ

片山星乃糸たし

細布ふらんま鹿のしる月

若流おりのまのまのま

秋の静ろしるし流一編

空のしるまんとおのまのま

小麻灌いす人層ふ窓のま

丸ちしるまのまのま

篠葉の雛子まのまのま

暮の川まのまのま

まのまのまのまのま

まのまのまのまのま



何事のこゝろ 芳名を記す  
等し 祥吉の如く 後  
少くし 業あり 何れも 中  
とらし 仁きぬ 子子 子孫  
此世の 世に 世に 世に  
書 何れも 何れも 何れも  
賜 皆 錦 繡 上 何れも  
口と 異く 毎 日 高 烟  
何れも 且 威 一 且 何れも  
巻末 此 紙 上 何れも

何れも

何れも

何れも

三世雪中庵後序

風月菴手定



